

実践のまとめ（第4学年 道徳科）

令和6年11月12日
小千谷市立小千谷小学校
教諭 松井 祐太

1 研究テーマ

追求問題に対して問題意識をもちながら、物事を多面的・多角的に考え、納得解を導き出す児童の育成

2 研究テーマについて

(1) 研究テーマ設定の意図

学習指導要領では、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習」が求められている。また、道徳科に生かす指導方法の工夫（発問の工夫）については、「教師の発問は、児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話し合いを深める上で重要である。発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考える発問などを心掛けることが大切である」など、指導上の工夫の例が示されている。

今までの実践では、児童の問題意識を高めながら児童と教師でつくる追求問題を意識して授業に取り組んできた。一方で、追求問題についての自分の考えをもった後、GIGA端末などを活用して共有することはできたが、友達の意見を鵜呑みにし、自分と友達の考えを比較したり、改めて考え直したりすることができない児童も見られた。そこで、新たな視点を与えたり、自分の考えを改めて考え直したりすることができるような手立てを取り、視点を広げ、より多面的・多角的に考えられるようにすることで、納得解が導き出されやすくなるのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

以上の点を踏まえ、問題場面の中で自分の立場を全員が表出することで一人一人が考えをつくる必要性が生まれ、その立場をもとに具体的な理由を考えたり、交流したりしながら納得解を導き出すことができると考え、本研究テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 自分の立場を表出することができるツールや学習活動の導入

授業前半部で問題場面について、ネームプレートやスケールなどを使用しながら全員に自分の考えを表出させる。このことにより、児童は自分の立場が明確になり、意見についての理由を考えたり、問題意識を高めたりすることを促していく。

② 児童と教師でつくる追求問題◎

事前アンケートや児童のつぶやき、ネームプレートやスケール等を活用した考えの表出の中から、児童の考えのずれや分からなさ、不明確さを教師が引き出し、追求問題を設定する。このことにより、児童の問題意識が反映された追求問題となり、意欲がより高まると考えられる。

③ 考え直すことや新たな気づきを生み出す（思考に転機を促す）補助発問

児童の考えの反対の立場を問うたり、児童の既存の価値観にゆさぶりをかけたりするなど、考え直したり、新たな気づきを生み出したりする補助発問を導入する。このことによ

り、児童の視点が広がり、多面的・多角的に思考を深めることができる考える。

(3) 研究テーマにかかわる評価

本時の中心発問について、中心発問提示後に自身の考えを書くことができた人数（割合）を、手立て導入前の授業と後の授業で集計し、比較する。また、記述の具体的な内容も比較する。

3 指導計画

(1) 主題名

世界とつながる日本（内容項目D-17 国際理解、国際親善）

(2) 教材名

「つながっている日本と外国」（「新・みんなのどうとく」 学研）

(3) 主題設定の理由

① ねらいとする道徳的価値

内容項目D-17「国際理解、国際親善」は、他国の人々や多様な文化を理解するとともに、日本人としての自覚や、国際理解と親善の心をもつことに関する内容項目である。我が国が様々な国々と関わりをもっていることに気付いたり、自分たちの身の周りには我が国以外の多様な文化があることやそれらの文化の特徴などについて理解したりすることは、自国と他国、それぞれのよさを感じ取ったり、他国の人々や文化を尊重したりするために必要である。

国際化が進む現代社会において、児童の身の周りには、外国のものと文化があふれ、外国に触れ合う機会も増えてきている。外国が身近に感じられる今、外国と日本はどのようにつながっているのかに目を向けながら、国際理解と親善の心を育めるよう指導することが求められる。

② 教材と児童

本学級の児童は、明るくとても素直な児童が多い。日常で食べた外国の食べ物やオリンピックの話などを話している姿が見られ、外国についての興味関心が高まっている様子も多く見られる。一方で、外国と日本の繋がりについて目が向いている児童は多くはない。

これまでは、外国語活動の学習などで、楽しみながら外国の文化に触れてきている。一方で、外国の様々な文化があることは知っていても、日本との繋がりについては理解が深まっておらず、自国と他国の共通点や相違点などについても明確に理解している児童は少ない。

本教材「つながっている日本と外国」は、日本とイタリアでは、共通点や相違点があることに気付いた明子とガイアが、さらに両国の違いやつながりに興味を湧いてきた姿が描かれている。また、日本と外国では様々なものが行き来している様子をイラストや写真を用いて示されている。児童は興味・関心を膨らませながら、日本と外国の繋がりについて考えることができる教材である。他国の文化を取り入れながら日本の中で発展してきたものがあり、それらについても考えながら、互いの文化や考え方などを大切にしようという道徳的実践意欲を育みたい。

また、本教材を学ぶ中で、日本と外国のつながりについて全員の考えを表出させながら本時の追求課題を設定することで、児童の多様な学習の状況や興味・関心に柔軟に応じることにつながる。それにより、児童が自己存在感をより感受することができるようになる考える。

(4) 他の教科、領域との関連について

	教科・領域	道徳科	教育活動
1 学期	外国語活動「世界のいろいろなことばであいさつしよう」(4月) 総合「五輪イヤー」(6月)	「アメリカとの出会い ジョン万次郎のぼうけん」(5月)	
2 学期	国語「くらしの中の和と洋」(10月) 音楽「日本の音楽でつながろう」(12月)	「つながっている日本と外国」(11月) D-17 国際理解, 国際親善	
3 学期	国語「読んで感じたことを伝え合おう『世界一美しいぼくの村』」(2月) 社会「国際交流がさかんなまちづくり」(2月)		

(5) 本時のねらい

日本の文化と外国の文化のつながりを見つけたり考えたりする中で、日本の文化や他国の文化には、それぞれの良さがあることに気付き、他国の人々や文化に親しみをもったり、つながりを大切にしたりしようとする道徳的実践意欲を育てる。

(6) 本時の展開

	□学習活動	○主な発問 ・予想される児童（生徒）の反応	◇留意点
導入	□教材を読んだ、感想を発表する。 □自分の考え（日本と外国のつながり）を黒板に示す。	○感想を発表しましょう。 ・動物の鳴き声の言い方を調べたことがあるな。 ・外国と日本で、いろいろなものが行ったり来たりしている。 ○自分の知っている日本と外国のつながりをたくさん出してみよう。 【外国から日本へ】 ・ピザ ・野球 ・ラーメン 【日本から外国へ】 ・寿司 ・柔道 ・うどん	◇事前に読んだ感想を提出させ、集計しておく。 ◇日本と外国の「つながり」について知っているものを問う。 ◇自分で見つけた「日本と外国のつながり」を、一人1枚以上黒板に貼ることで、自分の考えを表出させ、問題意識を高めていく。
展開	□学級全体で話し合う。	◎ 日本と外国でつながるとよいことは、どんなことがあるだろう。 ・外国のよいところをたくさん知ることができる。 ・例えば、アメリカなら、ピザとかハンバーガーとか日本に昔はなかった食べ物を知って、食べられるようになる。 ・外国の言葉を知ると、日本以外のいろいろな人と話せるようになる。そうすると、もっと外国のいいところを知ることができる。 ・日本のすてきなところを、外国の人にたくさん知ってもらえる。 ・すてきなところを知ってもらえると、自分たちもうれしい気持ちになる。 ・日本の美味しいものをいろいろな国の人に楽しんでもらえる。 ・ナポリタンみたいに、外国から来たものを進化させることができる。 ○ナポリタンのように、外国のものを日本で変化させたものは、よいつながりだと思いますか。	◇考えの整理のため、自分の考えをつくる活動を設定する。 ◇児童の意見を板書しながら整理していく。 ◇児童の発言の具体を引き出す補助発問をする。 ◇児童の様子を見取り、適宜思考に転機を促す補助発問をする。 「なぜナポリタンをつくらうと思ったのだろう。」 「カリフォルニアロールは、お寿司としてどう思

		・パスタを日本で進化させて、とてもおいしいものができたから、よいつながり。 ・確かに、外国のものを取り入れると、外国のものと日本のものを混ぜて、もっといいものをつくることができることがあるのかもしれない。 ・カリフォルニアロールで考えると、日本人も外国人も、もっといいものをつくりたい、美味しいものを食べたいという気持ちでつながりが生まれる。 ・それぞれの国のもので、いいところがたくさんあるし、それを大切にしようとする気持ちをもっている。	いますか。」 「カリフォルニアロールとナポリタンはどう違いますか。」 「ナポリタンをイタリアの人が見たり食べたりしたらどう感じると思いますか。」 「外国の人は、なぜカリフォルニアロールをつくらうと思ったのでしょうか。」 「他国の人に自分の国の文化を真似されると、嬉しい気持ちになる人と、嫌な気持ちになる人がいるのは、なぜだろう。」
終末	□学習を振り返る。	○今日の授業で大切にしたい考えやもっと知りたいことは、なんだろう。 ・それぞれの国でつながりがある。取り入れるときは、相手の国のことを考えると、よいつながりができる。 ・もっと外国のものを調べてみたい。外国のものを知るときは、どこがいいところか、その国の人がどんなところを大切にしているか考えたい。 ・それぞれの国の人が、自分の国の文化を大切にしようという気持ちをもっている。	◇自分が大切にしたいこと、もっと知りたいことを中心に、考えたことを記述する。 ◇日本人も外国の人も、自分の国のものをより発展させようとしていることに触れる。

(7) 本時の評価

① 評価の視点

- ・他国の人々や文化に親しみをもったり、つながりを大切にしたりすることについて、様々な立場や視点に立って考えたり、友達の意見を聞いて自分の意見を考え直したりして、多面的・多角的に考えたか。
- ・日本と他国のつながりを考える中で、これまでの自分を見つめ、他国の人々の考えや気持ちに歩み寄りながら、それぞれの文化のよさに気付くなど、考えを深めていたか。

② 評価の方法

- ・発言
- ・ノート記述

(8) 板書計画

「つながっている 日本と外国」

・ 児童の感想

みんなの知っている「つながり」

ナポリタン
の写真

カリフォルニア
ロールの写真

◎日本と外国でつながるとよいことは、どんなことがあるだろう。

- ・日本にはないものを楽しめる。
- ・外国のすてきなところをたくさん知れる。
- ・日本のすてきなところをたくさん知ってもらえる。
- ・外国のものと日本のものを混ぜて、もっといいものをつくることができる。
- ・もっといいものをつくりたい、美味しいものを食べたいという気持ちでつながっている。

振り返り
 大切にしたい考え、いいなと思った友達の考え
 自分の生活に活かしていきたいこと もっと知りたいこと

4 成果と課題

(1) 授業の実際

教材文は事前に宿題で読ませ、感想を書かせた。感想を書かせることで、児童の思考傾向を把握しやすくなり、発問の整理や教材提示のタイミングなどを考えやすくなったと感じる。また、事前に教材を読んだことで話合いや児童が考える時間に当てることができた。

導入では、教材文について確認した。教材文の最後で登場人物が「日本と外国のつながり」について調べ始めたことについて触れ、自分の考える「日本と外国のつながり」について用紙に記述させた。記述した用紙を、ネームプレートを使用し、「日本から外国」「外国から日本」「どちらともいえる」の3つに分類しながら黒板に貼らせた（写真1）。



写真1 記述した用紙を貼る児童



写真2 当日の板書

その後、児童が書いた考えを確認しながら『『つながり』がこんなにたくさんあると、何がよいのか。』と発問すると、児童から多様な考えがつぶやかれ、考えがまとまっていなかった様子が見られた。そこから、「外国と日本がつながると、よいことはどんなことだろう？」という追求問題を設定した。

追求問題について個人の考えを記述したカードを授業支援ソフト（ミライシード）のカード配付・回収機能（オクリンク機能）を使って提出させた上で、それを基に全体での話合いを行った。日本と外国とのつながりがあることで、「様々な食べ物が食べられる」「貿易によって利益が出る」など【ものの行き来（貿易）についての視点】や「お互いに助け合うことができる」など【平和に関する視点】の発言が出てきた。児童が提出したカードの多くに同様の記述が多く見られた。思考の偏りが見られたため、「なぜ、『ナポリタン』や『カリフォルニアロール』のように、自国に合うようにアレンジしたものを考えたと思いますか。」という教師の補助発問を導入した。話し合う中で、「自分たちの生活をよりよくしたい、豊かにしたい」といった視点での発言が多く見られるようになり、考えに広がりが見られる児童が多く見られるようになった。

(2) 手立ての有効性について

① 自分の立場を表出することができるツールや学習活動の導入

6月に行った手立て導入前の実践では、考えを記述できた児童が28名中24名であった。その内、11名の児童が複数の視点で考えを記述することができた。本時では、28名中26名が考えを記述することができた。また、17名の児童が複数の視点で考えを記述することができ、数値の高まりが見られた。このことから、自分の立場を表出させた後に考えを記述させる学習活動は、児童に自己決定の場を提供し、考えを記述したり、様々な視点で考えたりする上で有効であったと考えられる。また、この手立てについて児童に

アンケートを取ったところ、「みんなの意見が一斉に見られるから、分かりやすい」「聞いたことをすぐメモしなくていいし、みんなの考えで授業が進むからいい」など、手立てに関するよさを感じている記述が多くみられた（図1）。

さらに、児童の記述を見てみると「錦鯉」などの自分たちが住んでいる地域に関連しているものや「手話」など他教科（総合的な学習の時間で福祉について学習している）で学習したものを記述する姿が見られ、問題を自分に引き寄せて考える様子が見られた（図2）。

一方で、課題としてアンケートには「自分なりに考えを深めてから交流したい（自力解決の時間の確保が必要）」や、「記述した用紙の掲示のしにくさ」についての記述も見られた。

- ・みんなの意見がいつせいにたくさん見られるので、分かりやすくていいと思う。
- ・黒板に貼るから聞いたことをすぐメモしないでいい。
- ・みんなの考えで授業も進むからいい。
- ・みんなの意見をパソコンを使わずに見られる。パソコンを使うと動かす人がいるけど黒板にはれば気軽に動かせなくなるからいいと思う。
- ・みんなの意見がどっちなのかが分かる。似たところを見つけやすい。みんなの意見がよく見られる。

図1 手立て①についてのアンケート

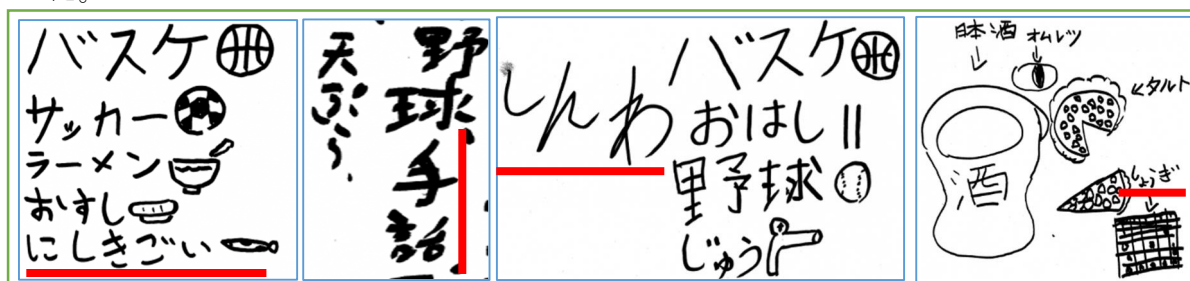


図2 立場を表出する際の児童の記述

② 児童と教師でつくる追求問題◎

本時では、図3のような流れで児童と教師でやり取りをしながら追求問題を設定していった。この手立てについても児童にアンケートを取り、「みんなが納得できていい」など、手立てに関するよさを実感している記述が多くみられた（図4）。また、「みんながいつもよりよく発表していた」という考えの発表意識の高まりや、「みんなが満足できる◎になった」といった自己存在感を感受することができるようになっている様子が伺える。そのため、手立て①の有効性で述べた「考えを記述する児童の数値の高まり」は、手立て②の効果としても見取ることができる。

自分の立場を表出させ、つながりがたくさんあることのメリットについて問い、多様な考えのつぶやきを引き出していったことは、児童主体で追求問題を設定する活動に効果的に働いたと考える。

（黒板に児童が自分の考えを記述した用紙を分類しながら貼った後）

- T: どんなものがあるか確認します。ハンバーガー、漫画、サッカー、錦鯉？え、錦鯉って日本から外国？
- C: 知っているよ。小千谷から外国。
- T: アニメ、柔道、ピザ、日本酒、タルト、神話？
- C: ああ、ギリシャ神話とか？
- T: ウサギと亀みたいな話か。ラーメン、ラグビー、手話？
- C: 総合で勉強しました。
- T: 勉強活かしていますね。
- C: たくさんあるな。
- T: これだけで、何種類くらいある？
- C: 20種類くらい。
- T: こんなにたくさんあるって、何かいいことあるの？（それぞれに自分の考えをつぶやき始める）
- T: いろいろ出てきて、分かりにくいんだけど、そこ◎でどうですか？（多くの児童が頷く）
- ◎日本と外国が繋がると、よいことは何だろう？

図3 追求問題◎が設定されるまでの授業記録

- ・みんなの意見から◎を決めていたので、みんなが納得できていいと思いました。
- ・みんなの考えが◎になってみんなも満足できる◎になるからいいと思う。
- ・みんながいつもよりよく発表をしていた。

図4 手立て②についてのアンケート

③ 考え直すことや新たな気づきを生み出す（思考に転機を促す）補助発問

児童は、教師からの新たな気づきを生み出す補助発問により、自分の考えを振り返ったり、立ち止まって考えたりする姿が多く見られた。

本時では、日本と外国とのつながりがあることで、「様々な食べ物が食べられる」「貿易によって利益が出る」など【ものの行き来（貿易）についての視点】や「互いに助け合うことができる」など【平和に関する視点】が中心だった思考から、手立て③の補助発問を導入した後では、「日本人としては良く思わない」「上手く外国の文化を再現できないからなのでは」という発言が出てきた。そこでさらに、「なぜこのようなお寿司を考えたとと思う。」と発問すると、「自分（外国の方々）たちにとっておいしいものにしたいという気持ちがあった」「ナポリタンも同じ考え方なのではないか」などの発言が繋がっていき、「自分たちの生活や文化をよりよいもの、豊かなものにしたいという思いがあった」という視点が生まれてきた。日本人としての視点から日本の文化を取り入れる外国の立場にも寄り添う思考が生まれ、共感的人間関係が育つ要因にもなったと考えられる。

下図は、抽出児の授業展開時と振り返りの記述の変容である。A児については、「交流によって物が豊かになる」という考えだったが、よさの融合による文化の発展について気づき、記述していることが読み取れる。また、B児の記述の変容では、教師の補助発問やそれに対する友達の意見を受け、多面的・多角的に考えることができたと読み取れる。（図5）

以上の様子から、教師の補助発問をきっかけに児童の考える視点が変化し、新たな気づきや他の発言との繋がりを得ていることが分かる。

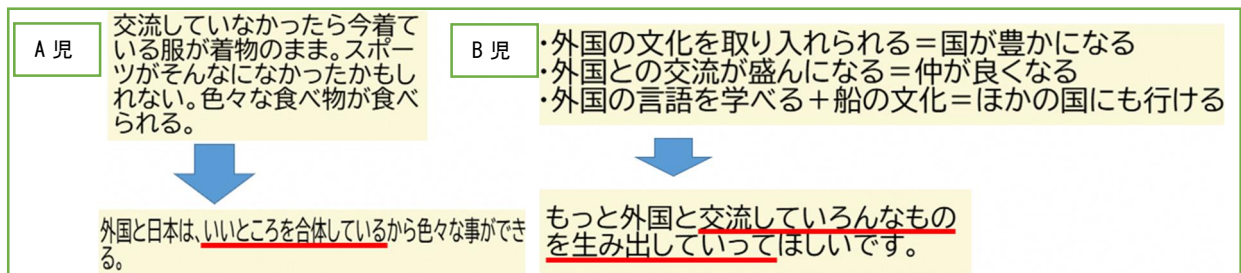


図5 抽出児の授業展開時と振り返りの記述

(3) 今後の課題

今回の研究では、「追求問題に対して問題意識をもちながら、物事を多面的・多角的に考え、納得解を導き出す」ことについて実践した。今後は、児童の発達段階や実態、または様々な特徴の教材に合わせた立場の表出の仕方についてさらに検討し、どのような手立てをとるのが適切か考えていきたい。

また、どのような思考傾向の状態の時に、どのような補助発問が有効なのか、児童の思考に沿って提示できるような方法を検討していきたい。

<参考・引用文献>

文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』2015.7

南魚沼市教育委員会『「特別の教科 道徳」（道徳科）授業づくりハンドブック～全員参加の道徳授業を目指して～』2021.4

永田繁雄『多面的・多角的思考を促す 道徳教材発問大全集』明治図書 2024.6

加藤宜行『加藤宜行の道徳授業 考え、議論する道徳に変える導入・終末&評価の鉄則 31』明治図書 2022.2

加藤宜行『加藤宜行の道徳授業 考え、議論する道徳に変える教材研究&授業構想の鉄則 35』明治図書 2020.3